

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 長田 十一

私は、大正十二（一九二三）年八月四日、富士山麓の標高千メートルの高原農家に生まれ、高小卒業後農業に従事中、昭和十九（一九四四）年四月三十日、臨時召集兵として東京赤坂の東部第六部隊（鉄道隊）に入隊。直ちに満州国滨江省ハルピンの香坊第二鉄道連隊に転属、鉄道機関士の教育を受けながらチチハルや北安、奉天（瀋陽）等満州内鉄道路線の運転業務に服していました。

一、終戦から収容所まで

昭和二十年八月十日、牡丹江駅内でソ連軍の侵攻を知り、私も鉄道隊は横道河子駅まで前進し鉄道警備に当たりましたが、八月十五日、横道河子陣地で終戦の詔勅を聞き、部隊長以下悲涙を流

しました。十八日までは陣地潜入のままでソ連軍と対決する覚悟でした。十八日の早朝、ソ連の爆撃機が来襲し河子駅に爆弾を投下し、停車中の汽車十八両が全焼する被害を受けました。その日の午後、ソ連軍戦車が侵攻してきたので武器を捨てて駅の荷物集積舎を収容所として、そのまま捕虜とされてしまいました。

私たち兵隊は、日本が戦争に負けると思ったことはなかったし、もし負けるくらいならいつそこで自決しようと言う将校もいましたが、私どもの隊長は「ここで死んでは犬死にだ、生きて祖国に帰って日本の再建に尽くすことが天皇の命令だ」と言われたことが今でも忘れられません。

八月二十五日朝、ソ連軍の命令で「東京ダモイ（帰る）、ダワイ（早く）」とせき立てられて、駅構内の収容所から米国製大型トラック十六輪車に乗せられ、「陸路ウラジオ港まで行き日本に帰るのだ、お前たちは運がよいぞ」と話してくれました。大型トラックに乗せられた私ども中隊約五百

人は二十台以上の輸送隊となつて、昼夜を問わず約六時間の行軍で一時間の休憩、徹夜の行軍で三日間も行軍を続けて、野を越え山を走り、原始林を抜けて北進しました。

途中で気づいた朝鮮出身の兵隊二、三人が輸送隊から脱走しましたが、すぐ射殺されたと聞かされました。もはや仕方なしと観念したところ、車は黒龍江を越えてブラゴエシチェンスクに到着しました。

二、収容所生活

1. 広野の中の第一次収容所

私どもはブラゴエシチェンスク市内のタロエーという収容所に千人ほどが収容されました。宿舎はなく、南向きの日当たりの良い広野にソ連軍用の大天幕舎を張り、一幕舎約五十人で住みつきました。

九月末のシベリアでは夜は零下、雪も降るといふ寒さの中で夏服のままの着たきり雀でしたか

ら、夜は寒くてたまらず、天幕の中へ枯草を敷き、戦友と抱き合つて温め合うという苦行でした。

このころの作業は、鉄道駅構内において満州国から略奪してきた食糧や生活用資材、軍需品等を貨車からおろしたり、倉庫を造つて積み込んだり、戦利品、糧秣等の格納作業に駆り出されましたが、ノルマもなく割合軽労働でした。食糧は、アワ、大豆、大麦、コウリヤンだけで米やパンの主食の配給なく、兵隊は次第にやせ細ってしまいました。その上、野営生活、何しろ着たままです真つ黒な生活、一カ月一回市内のバーニヤ（湯屋）に入るだけですから、シラミの発生には困りました。夜中にかゆくて寝られず、ペーチカの上で下着を振ればパチパチと火花のようにシラミが飛びはねるといふ誠に汚い話です。それでも、他の収容所（木造）のように南京虫は出ず、伝染病も出なかつたのが幸いでした。

2・ニコライエスク第二収容所

昭和二十一年四月過ぎ、春が来ると私も五百人くらいの作業中隊は、ニコライエスクという農場の多い街に転属させられました。ここはシベリアでも割合気候が温暖だったためか、コルホーズ（国营農場）施設が多く、広い平原が見渡す限りの農園でした。私もは、この農場近くの小高い丘の上の「ドイツ人捕虜収容所」（木造半地下式の丸太積み棟舎）に入れられ、作業はこの農場の手伝い人足に従事することでした。私もは二十人ずつ五組百人の作業隊で揃って出役。毎朝八時から十七時まで、八時間労働で、バレイシヨ、トマト、キャベツ、大麦、小麦等の作付、手入れで、収穫等ソ連の労働者と一緒に働きました。大農場でソ連の方々と一緒に作業ですから作業も割合軽く、職場も明るく、農場長やソ連の方々も揃って私ども抑留者に対して親切で、仕事を通じて仲良くなり、パンやバレイシヨを持ってきて恵んでくれたりしたので、私ども収容所内まで明る

くなりました。

私はこの収容所に転入してから、偶然にもソ連側収容所長の住宅掃除当番に選ばれました。このころから栄養失調症という病気にかかり重労働もできなかつたので、掃除やまき割りには絶好の仕事だと思つて一生懸命に働きましたので、収容所長や奥方に喜ばれたりかわいがられました。特にこの奥方は樺太生まれの日本人で、収容所長がサハリンで勤務中に結婚して仲良しで、かわいらしい子供（娘）を一人抱えての生活で、私も日本人捕虜に対して格別に優しくしてくれました。私は当番兵という通行証をもらっていましたので、毎日一人で所長官舎に行くとお方はパンとコーヒーを必ず作つておいて「オサダ、早く食べなさい」と私を子供のようにかわいがってくれました。病弱な私がああ地獄から生きて帰れたのもあのお方のおかげだと今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

三、抑留中の不幸な出来事

昭和二十一年十月ごろ、私は戦友菅井上等兵と二人、同中隊の島田利夫准尉の引率で收容所裏の小高い台地に收容所の庭に敷く砂運搬のトラックに乗り込みました。砂取りは三回でしたが、二回は無事終わり、最終回の帰り道、運転手のソ連兵が運転を誤り、左側路肩を踏脱し左側道路下に転落、トラックは一回転して三メートルも落下、助手席に乗っていた島田准尉は自動車の下敷きとなって即死、戦友菅井君は左下足部を骨折、私は上方荷台の土の上に乗っていた関係で運良く大地に投げ出され、砂の上に軟着陸ということでスリ傷だけで無事でした。同じ自動車に乗り合わせながら私一人無傷だったという運の良さ、これこそ神仏のお加護のおかげだと心から感謝し、今でも忘れ得ぬ思い出になっています。

四、野草、野生動物で生命つなぎ

シベリアでも春六月頃になると野草がもえ、湿

地帯にはカエルや蛇、原始林にはネズミやウサギやクマまで動き出す。食糧のない私ども捕虜は天の恵みと、食べられるものは何でもとって食しました。

私は富士山麓の農家生まれであるので野草や小動物は子供の頃から食べ方を知っていたので、みんながとってくる野草の選別の先生となった。特にカエルや蛇、ネズミやウサギの皮むきは私の独壇場であった。私は皆がとってきたカエルや蛇の皮をむき、内臓は私がいただけ、血をすすり、肉や骨は焼いて粉にして精力剤として皆で分けて飲み、特に病人に薬として珍重されました。

野草も富士山麓の一合目〜三合目にあるヨモギ、アカザ、タンポポ、フキ等がありましたので、私が見分け役で、よくとってビタミン補給食だと食べました。

五、民主運動と東京ダモイ

昭和二十二年七月初旬、收容所長から「東京ダ

モイ」の命令が出て、私ども作業隊千人はシベリア鉄道常設の貨物列車に乗せられブラゴエ駅から夜中に出発、二昼夜走り続けてナホトカ港に着きました。ナホトカの収容所に入ってから、第一収容所、第二収容所と約二週間、赤腕章をつけた「共産主義教育委員」という指導者に、民主教育だと言って「ソ連邦の革命史」とか日本の天皇制だとかの講義を聞かされたり「赤旗の歌」とか唄わせられ、「これが分からなければ再び奥地に戻して再教育する」とおどかされましたが、私どもは作業隊は病人（栄養失調症）が多いことを理由に二週間くらいの教育で「日本ダモイ」を許してくれました。

昭和二十二年七月二十日、日本国差し向けの引揚船「高砂丸」に乗船し、日本海を渡る道中何事もなく、二十二日朝、夢に見た祖国舞鶴港に生還することができました。

六、子孫に言い遺したいことば

私は帰国後、父母の家で農業に従事し、妻もめとつて一男一女を育て、平穏な生活を送ることができるのも、あの地獄で一緒に働いた戦友（栃木県佐野市、樽見龍三郎様方）のおかげだと今でも感謝しています。

なお、私はシベリア当時の栄養失調症が原因で帰省後次第に視力を失い、今は失明して不自由な生活を送っていますが、あの凍土で果てた戦友を思えば、こうして祖国再建に参加できた私は幸運者だと心から感謝しています。

最後に私は、家族や日本国民の皆さんに遺言として言い残したいことばは「今後日本は平和憲法を守り、決して戦争はしない」ことを永久に誓い、「家中仲良く暮らしてもらいたい」とお願いし、この労苦報告を終わります。